

## 始まりは憧れから

小佐 美智子

5歳くらいのとき、京都から九州の熊本市へ父の仕事の関係で引っ越しました。当時、近所に幼稚園もなく、言葉や多少の文化の違いから近くの子供たちとはなかなか馴染めない、淋しい子供時代をすごしました。従って、家の外では非常に暗い少女でした。それから数年して私たちは恐ろしい世界大戦の洗礼を受けることになります。

終戦になり、アメリカ文化が華やかに街を彩る頃となりました。中学校は繁華街のど真ん中にある、歴史の古い女学校でしたが、すぐ近くに「アメリカ文化センター」なる施設が建ちました。米国の文化を日本に紹介するような、そして日本の文化レベルを引き上げるような趣旨の施設でしたが、私はあちらの美しい雑誌や本に魅せられましたし、そこで働く職員の方々に憧れの気持ちまでも抱きました。英語会話教室も開かれていたので私は早速入会し、自分より年上の高校生、大学生、社会人の方々と一緒に会話を習っていくうちに、自分の性格が変わっていくのを感じました。英語は自分の意思をはっきり表すような文体になっています。はっきり言わねば言葉がなりたちません。そのおかげか、白黒をはっきり言う習慣がつき始めたような気がするのです。英語は私の性格にまで影響を与えたのでしょうか。

熊本市には米軍基地があり、市内にはアメリカ兵士があふれていました。習い覚えた会話の勉強にと、よく街角で彼らと話した覚えがあります。道案内など自ら買ってでたりしたものでした。

中学の同級生の中では、誰一人として私と一緒に会話を習いたいという

人はいませんでした。学校の英語の授業だけでもうんざりなのに、何を好き好んで会話まで習うのか気持ちがわからないといった感じでした。私は「暗い子」から「変わった人」となりました。でも、そんな評価など全然気になりません。その頃にはすでに、今で言う **debate** を年上の人たちと戦わせるくらいにまでなっていました。一緒に勉強した人たちの中には、後にアメリカの病院に医者として勤務した人や、航空管制官になった人などおられ、色々な展開がありました。

外国には **Pen pal** をたくさん持っていて、私の家には毎日外国から手紙が届きました。郵便局の配達の人が外国郵便を毎日のように置いていってくれるもので、近所では、田舎のことでもありかなり評判になっていたようです。私はそんな噂などもまったく意に介していませんでした。

高校二年生の頃だったと思いますが、隣町のある女性が尋ねてきました。自分の手紙を英訳してほしいとのことでした。わけを聞きますと、彼女には米国兵で軍曹 (**Sergeant**) の恋人がいて、朝鮮で戦っているのだというのです。

その頃、北緯 38 度線で南北をわけた朝鮮戦争が始まっていました。彼女は戦地で戦う彼に励ましの手紙を出したいというのです。私は喜んで即座に彼女の言葉を英文の手紙に綴って手渡しました。彼女は喜んで、箱入りのお菓子と百円紙幣を一枚くれました。私が自力で始めてお金を稼いだ瞬間でした。彼女 (T子さん) は毎日のように私の家を訪ね、毎回1通の手紙を依頼しました。そしてその都度、百円紙幣を一枚支払ってくれるのでした。当時、高校新卒で市役所などの公務員の初任給が五千元くらいと聞いたことがあります。それと比較して百円とは法外な収入だったのかも

知れません。1ヶ月に20通より少ないことはありませんでした。結構な収入を、しかも、無税で得ていたわけです。(内緒に願います)。ところが話はこれだけでは終わりませんでした。T子さんからの紹介で、今度は他の若い女性(Sさん)が手紙を依頼にきました。それから、またまた、別の女性(Kさん)がかわいい青い目の子供を連れて手紙を依頼しにくるようになりました。アメリカ兵士の日本人妻というか、何というか、そういう女性が私の家へ出入りするようになりました。なぜ私に依頼するのか理由をききましたら、会話教室の先生などに依頼すると、必ず下書きを要求され、即日渡してはくれないからとのことでした。つまり、私なら下書きなしの口述で手軽に書いてくれるというのが一番の理由だったらしいです。愛情で(あるいは打算で)結ばれた関係の相手への、恋文ないしはある種のビジネス・レターなのですが下書きまでは面倒だったらしいです。勿論返事も来ました。そのときは無料で読んであげたことを書き添えておきます。

内容はいろいろです。時には愛情をこめた表現を依頼されました。「そこは適当にやさしい言葉を書いといて」とか、「とってもさびしい、と言ってね」とか、ともかく「うまく書いといてね」でした。

こんな時、「高校生の私にそんな愛の表現を英語で書けなんて・・・」などとは一切言ったことがありません。その当時から私は大のジャズファンでしたし、前述のアメリカ文化センターでは「ジャズレコードコンサート」の常連でした。ですからジャズのボーカル曲は数多く知っていましたし、家でも歌っていました。ジャズの Verse は、愛情表現の Phrase のオンパレードではありませんか。

” Good night, sweet dreams!

Tomorrow's another day, till then,

Sweet dreams sweet heat!” とか

” If I ever needed love, I need it now!

I can't remember when I've ever been so blue...” などと、したり顔で口ずさんでいた頃でしたから、それらの中から1言、2言拝借すれば良かったのです。こんなに楽しい仕事があるでしょうか。私にとっては趣味と実益を兼ねた作業をするわけですから、まさに至福の時といっても過言ではありませんでした。こういう日々がどの位つづいたのか、今となっては定かに記憶していません。T子さんはめでたく結婚し、夫婦揃って旦那様の郷里ミシガン州へと帰っていかれました。Kさんは病気で亡くなられ、アメリカ兵士の旦那さんが忘れ形見をつれての帰国となりました。それに関係して、家庭裁判所へ行って子供の認知関係の手続きの通訳もしました。悲喜こもごも、複雑な人生の側面を見せ付けられた一時期ではありました。

その後、私自身が勉学途中で大病をして数年を病床で過ごし、様々な曲折を経ましたが、何とか命を取り留め、26才の頃大阪の外資系貿易会社に就職しました。その延長線上に、現在の私がいるわけです。それにしましても英文恋文代筆業と自称していたこの一時期の出来事はまさに、外注で翻訳をするという現在の生活をそのまま予告していたかのようです。真面目な生徒とは程遠い、今の流行語で言えば「チョイ悪」な学生生活を送っていた頃の思い出です。